

① J・R・ヒックス著（新保博ほか訳）

『経済史の理論』

（講談社学術文庫、一九九五年）

② 塩沢由典著

『複雑系経済学入門』

（生産性出版、一九九七年）

③ アダム・スミス著（水田洋訳）

『道徳感情論』上・下

（岩波文庫、二〇〇三年）

グローバル化と脱工業化の流れの中で経済は大変貌を遂げつつある。しかし、何度も危機が叫ばれてきた経済学の大転換はおそらくこれから。こんな時代には歴史の大枠を理論的に考える癖を付けるのがいい。まず、理論経済学者ヒックスが貨幣や市場の進化について説明した①を読んで、現在経済社会の行く末を考えてみることをお勧めする。②を読むと、現代経済学がなぜ複雑さという問題に直面しているのかが理解できる。利己的な人間がいかに平和的に共存しうるかを説いた③は、市場機構を支える経済主体として、合理的「経済人」とは異なる人間像を提示している。社会に出るまでにぜひ読んでほしい「教養」のための一冊。

西部忠

北海道大学大学院経済学研究科助教授